KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「一般言語学」の草稿におけるソシュールの言語理論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 愛紀 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006288

関西外国語大学 研究論集 第81号（2005年２月）
Journal of Inquiry and Research, No.81（Feb. 2005）

「一般言語学」の草稿におけるソシュールの言語理論

近 藤 愛 紀

序

1996年にジュネーヴにあるソシュール邸の温室の片隅にあった段ボール箱の中からソシュール自筆の大量の草稿が発見された。これらの草稿の中で最も注目されるのは、「言葉の本質的な二重性について」と題されたものであり、それには「序文」も付されている[1)]。1890年代にソシュールが密かに「言語の一般理論」に関する「書物」に取り組んでいたことが、改めて確認されたのである[2)]。

1891年11月のジュネーヴ大学就任講演の草稿には、「いつか、語の科学の最大の攪乱者としての語の役割について書かれた、風変わりだが非常におもしろい専門的な書物が刊行されるでしょう[3)]」という「書物」への貴重な言及が見られる。この講演から２年余り経った1894年１月４日付の、パリ時代の教え子であるアントワーヌ・メイエに宛てた有名な書簡でも、ソシュールは「一冊の書物」についての構想を表明している。

> （……）だがこういったことすべてにまったく嫌気がさしています。言葉（ランガージュ）の事象に関してまともに意味の通じるような具合に何か書こうとするのはわずか十行だけにしても、まず困難なことで、その困難さにも嫌気がさしています。随分前からこうした事象の論理的分類や、それらを扱う観点の分類に関心を持っていますが、だんだんとその仕事の厖大さが分かるようになってきました。その仕事とは、一つ一つの操作を、前もって予想したカテゴリーに還元することにより、言語学者に対して彼がしていることが何かを示す仕事であります。そしてまた同時に、言語学において人が最終的になし得ることのかなり大きな空しさも分かってきました。
>
> （中略）
>
> 現在ひとびとが用いている術語法の愚かしさ、それを改革する必要性、そのためには言語（ラング）一般とはどういう種類の対象であるかを示す必要性、こうしたことが絶えず、私の歴

史に対する喜びを損ねてしまうのです。私としては、言語一般にかかわらないで済めば、それに越したことはない、と考えているのです。

こういったことは、結局のところ、私の意に反して一冊の書物になるでしょう。その書の中で私は、感激も情熱もなく、言語学には私が何らかの意味を認められるような術語が一つたりとも使われていないのはなぜなのかを説明することになりましょう。正直なところ、その後になって初めて、私の仕事を、放り出してあったところからまた始めることができると思います[4]。

ソシュールはこの手紙で、「言語学において人が最終的になし得ることのかなり大きな空しさ」を冷静にというよりもむしろ覚めた調子で叙述している。そこには自己の学説を誇らしげに披瀝しようとする姿勢などは微塵も感じられない。「言葉（ラングージュ）の事象」に真正面から取り組む過程で「言語（ラング）一般」への問いが生まれ、そうした中で言語学における科学的言説を危うくするような何ものかと彼は向き合っている。言語学の術語法が検討されなければならない最も深い理由もおそらくそこにあるだろう。ゴデルはこの書簡を引用しながら、バイイとセシュエの編纂した『一般言語学講義』との余りの格差に戸惑いを隠し切れず、「ソシュールの人物像」は「神秘に包まれてくる[5]」と述べている。実現されることのなかったソシュールの一般言語学に関する「書物」について、1957年の時点では、決定的な判断を下すことは、確かに難しかったとは言え、『講義』の編纂方針に疑問を投げかけることを控え、そればかりかソシュールの「逆説好みの性格[6]」を批判さえしているところに、ゴデルの無理解が垣間見られる。ゴデルの言うのとは反対に、言語という存在自体が逆説的な存在なのではないか、と考えることもできるからである。こうした逆説は、ソシュールという個人の問題にそれを還元してしまうか、それともまた、彼が立ち向かっている言語というまさに一筋縄ではいかない対象に帰するかで、それは全く違った様相を呈してくるはずなのである。

1996年に発見された草稿のテーマである「言葉の二重性」こそソシュールを脅かす言語の根本的な性質ではなかったか、と考えることができるのだが、1894年に書かれたホイットニー論の草稿においても既に彼は次のように述べている。「我々は、何年も前から、言語学が二重の学問だという確信を抱いてきた。二重性はあまりに深く、取り返しのつかないほどなので、実を言えば、言語学の名で偽りの統一性を維持することに、十分な理由があるのかどうか疑わしいほどなのである。まさに、私たちが日々戦っている、あらゆる誤り、すべての錯綜した罠は、この統一から生じてくる[7]」。こうした二重性についてはバンヴェニストも指摘している。彼によれば、ソシュール学説の中枢をなす原理とは、「言語とはいかなる視点から研究しようとも常に二重の対象であり、一方は他方があって初めて有効であるような二つの部分からなる対象だ」ということである。「事実、言語活動においては、すべてが二つの項として定義され、

またすべてが二重性の刻印を押されている」として、次のような項を挙げている。「調音（分節）と聴覚の二重性、音と意味の二重性、個と社会の二重性、ラングとパロールの二重性、物質的なものと非実体的なものの二重性、《記憶によるもの》（範列的なもの）と連辞的なものの二重性、共時態と通時態の二重性、等々」。「こうして対立させられたそれぞれの二項は、いずれもがそれ自身では価値を持たず、実体的現実を示すものはない。それらの各々は、それがもう一つの項と対立することによって初めて、その価値を得るのである[8]」。バンヴェニストは、『一般言語学講義』ならびに『ソシュール研究誌』第12号（1954）に掲載された「セシュエによる『ソシュールの手稿』の写し」（『講義』編纂の際に、セシュエによって利用されたもの）から以上の興味深い考察を行なっている。我々は新資料に、そのことを裏づける言明を見出すことができる。「言語（学）的同一性は、二つの異質の要素の結び付きを含むという点で全く特別なものなのである[9]」。だがこうした二重性は、「二つのもの」として定義すること自体が既に可能なのかどうなのか疑問となるような仕方で、つまり「二つのもの」に分離することが殆どできないような仕方で、すべて結び付いていることに、注意する必要がある。なぜなら、そのいずれの項も、対の項なしには成り立たないものとして考えられており、そうした関係の方が二つの項より根元的であり、それらの価値を生み出すものだからである。本論では、ソシュールが直面していたこの「言葉の二重性」という問題に焦点を当てて、「一般言語学」の草稿の読解を行ないたい。ソシュールの言語理論を支える基本概念を中心に考察していく。

1．価値（valeur）の概念

コンスタンタンの取った第三回講義ノートによれば、ソシュールは、まず「どんな領域においても価値が何であるかを述べることは極めて難しい」ので「大いに慎重にならなければならない」と説きながら、「価値は1°交換することができる一つの似ていないものによって、また、2°比較することができるいくつかの類似のものによって、決定される[10]」という定義を与えている。そしてこの定義を説明するために、例えば20フラン硬貨がそれに相当する数リーヴルの重さのパンという「一つの似ていないもの」と交換され、その20フラン硬貨が1フラン硬貨や2フラン硬貨などの「類似のもの」と比較されうるという具体例を挙げて「価値は一方の相対面（contrepartie）であると同時に他方の相対面でもある」という指摘を付け加えている。次いですぐソシュールは言語（的）価値の説明に移り、「語の意味（signification）は、語と交換可能なものだけを考慮することによっては決して見出され得ない」ものであり、従って「比較しうる諸々の語からなる類似した系列を比較しなければならない」のであり、「語を個々別々に捉えるわけにはいかない」と述べている。つまりソシュールは、「語の意味」を価値として捉えなければならないことを強調している。だがここで、我々がぜひとも避けなければ

ならないのは、価値が「それ自身の中に規則を有する事物に類似」しており、「何か絶対的な実在であるかのように」錯覚することなのである[11]。彼の説明は客観的で明確であるが、しかしそれが明確なだけに、あたかもそこに既成の価値体系が存在しているかのような錯覚に陥ってしまう虞が、大いに有るからである。確かに、ソシュールはここで価値を決定する二つの条件を提示してはいるが、同時にまた、それに伴って生じてくる「価値が何であるかを述べること」のこの上ない難しさについて語っているのを看過できないのである。こうした価値のいわば否定的な側面は、未発表ノートのN23.6――3340項――の一節でも浮き彫りにされている。

> 価値は、顕らかに、絶えず［どの瞬間にも］、諸々の類似の項から成る体系内に位置した辞項（terme）の同義語であり、同様にその辞項は、顕らかに、絶えず、それと交換可能なものの同義語でもある。一方でその交換可能なものを、他方で体系を共にする［同一体系内の］諸辞項を取り上げるならば、両者はいかなる類縁性も示さない。これら二つのものを関係づけるのが価値の固有性（特性）なのである。価値がそれらを関係づけるその仕方は、価値の持つこの二つの面が価値に対して異なるものなのかどうか、またそれらが何によって異なるのかを探索することが不可能なために、精神をして絶望にまで至らしめるようなものなのである[12]。

ブーケはこの箇所を「記号の体系的な価値（体系から生じる価値）と記号の内的な価値（シニフィアンとシニフィエの相互作用から生じる価値）が、分かち難く結び付いている」ことを、ソシュールが論証したものだとしている[13]が、より重要なのは「価値」の「捕らえがたさ」の方にあると私には思われる。つまり、上記のように、価値の持つ「二つの面が価値に対して異なるものなのかどうか」ということ、また「それらが何によって異なるのか」ということを「探索」するのが、一体どうして「精神をして絶望にまで至らしめる」ほど「不可能」なものになるのかと言えば、それは価値が「一方の相対面であると同時に他方の相対面でもある」という一見明白に思われる事象にとらわれると気づかないのだが、実はそこに示された価値の構成要件の同時性（「…と同時に」）に起因する。というのは、「価値」は交換可能な「似ていないもの（異なったもの）」と「体系を共にする（共―体系的な）」「類似のもの」とを、「同時に」関係づけるところに初めて成立するようなものだからである。つまりそれは、類縁性を持たない異質の二項を結び付け、その結び付き＝聯繋によって、結合された辞項が互いに異なるものでありながら、一つの存在として成立するという尋常一様でないものであるが故に、我々の「精神」が決して手放そうとしないいわゆる同一律・矛盾律に逆らう形で、あるいはそうした通常の形式論理を越え出るものとして、我々の精神に対して現れてくるからである。同一律に基づいて「価値」を対象化しようとするとき、それは同じもの（「類似のもの」）として同定さ

れると同時に、別なもの（「似ていないもの」）としても同定されるものでなければならない。そうであれば、それはそのまま同じものが“異なるもの”でなければならないことを意味し、同一律に抵触してしまうから、「精神」はそこで明らかに同一性の認定ができなくなり、認識不可能な状態に陥ってしまう。反対に、どこまでも同一律に執着するならば、今度は価値の方が崩壊し消滅してしまうことになる。だがそれは、一つの同じあるものが、ある時には別の側面を見せ、またある時にはさらに別の側面を見せるというのではない。

問題は、語と観念であれ、音と思想であれ、意味するものと意味されるものであれ、両者の結合は確かに存在し実感されるのに、その組合わせの秘密は我々の精神では把握し得ないというところにある。つまり、それは「神秘」というほかはない。なぜ我々の精神で把握し得ずまたは解し難いかは明瞭で、それは論理に従わないからである。両項の内的結合によって「いわば神秘的な事実（le fait, en quelque sorte mystérieux）[14]」が出現するとき、対立する構成要素の各項は互いに入れ替わり、変換しうるという特徴を持つ。「音声が概念的な実質の持つ一つの性質になるように、概念は音響的な実質の持つ一つの性質になる[15]」。「記号を構成する結び付きにおいては、最初の瞬間から一方の存在があって初めて他方が存在する二つの価値しかないのである[16]」。つまり二つの辞項の結びつきは不可分で、緊密で、融合して存在する。互いに自らの特徴を喪失し変質し合うという意味で、このとき語（音）と観念（思想）とは一致し、同一に帰する。従って、「神秘」を構成する要素は、いわば可逆性の二重になった構造を持つのである。ソシュールのもくろみは、この「神秘」を組み込んだ言語の法則を定立することにあると言ってよい。だが、さきほどのノートの末尾において、

> この類似（simile）　対　非類似（dissimile）の関係は、類似（simile）　対　諸類似（similia）という関係とは全く異なった別のものであり、しかもこの関係は、それにもかかわらず、捕らえがたい形で、価値の概念の深奥にまで存在している[17]。

とソシュールが改めて強調しているのは、「価値」のあらわすこうした尋常一様でない関係を十分に認識した上でのことと思われる。価値を扱うことは、いわば「精神」を危機に陥れるということであり、そこに彼は言語の持つ恐るべき姿を垣間見ていたことになる。

2．言語記号の恣意性、記号の意味作用

記号の一般理論に関するソシュールの未発表のノートの一つに、整理番号でN15というのがある。エングラーによる校訂版の通し番号では、3306項から3324項まで、各々の項に属する下位区分を含めて87篇からなり、そこにはまったく独創的な記号観が書き留められている。デ・

マウロも言うように、「言語に関する完全な一般理論を作り上げるために、最も集中的に「ソシュールの」関心が払われた時期が、1890年と1900年の間に位置づけられる[18]」とすれば、1897年頃に書かれたと推定されるこの未発表ノートは、ソシュールの「一般理論」についての考えを忠実に伝えているものと見做すことができるだろう。以下では、N15の二つの項を検討する。

（1）3320.4項

この項では、「私」が散歩の途中で気晴らしにある樹木の幹に彫りつけた一つの小さな刻み目が、一緒にいた人によってすぐ何か二、三の意図（イデー）（観念）に結び付けて受け取られてしまうという例が挙げられ、「すべて物質的なものは何でも、私たちにとっては既に記号なのであり、すなわち、それは、私たちが他のいくつかの印象に結び付ける一つの印象（impression）なのである。（……）言語記号の唯一の特徴は、他のどんな結び付きよりも、明確（正確）な結び付きを生み出すことであり、おそらくそこには、契約的なソーム「シニフィアン」の上にしか実現されない、観念連合（連想）の最も完全な形が見出されるであろう[19]」と述べられている。記号とは、あくまでも何かを表す（ための）記号でなければならない。そのように何か他のものの代わりをするという表象作用は、木の幹に彫られた小さな刻み目や、未知数を表すxというごく単純なケースが示すように、代わりになる他のものと「似ていない」もの、無縁なものであることによってさらに強められる。そのことは、記号がその代わりになる何か別のあるものと有縁であるという逆の場合を考えてみた方が、分かりやすいであろう。すなわちその場合には、記号は、代替する他のあるものの方に限りなく接近していくことになり、従って、それに応じてその表示機能もまた著しく狭められ限定されていくことになってしまい、最終的には、記号の消失という危機的な状況に至らざるを得なくなる。つまり、意味に対する記号の無縁性というものは、いわばそのポジティブな条件であるだけでなく、さらに記号を記号たらしめる必須条件をもなしているのである。それは、意味に対する一種の不浸透性のようなものであり、水を弾く布地のように意味を撥返すものでなければならない。他方で、記号の持つこの意味に対する無縁性は、意味の側から見れば、それが意味と無縁である以上、どんな記号とも結び付く可能性を持つことになるのであり、そのことは、これより前の3318.9項で、「同一能力の原理（Principe de l' *Identique capacité*）[20]」として規定されているものなのである。つまり、いかなる記号もある意味を同等に表す能力を持つということである。それはまた、のちにソシュールが「記号の恣意性」と呼称して言語学の「第一原理」としたものに他ならない。この言語記号の恣意性、つまり「言語記号が、その指し示すべきものと、本来的には、関係がない」という性質から、言語の諸辞項がそれらの相互的な差異だけから成り立っているということが導かれ、従ってそれが、実証的（実体論的）な思考からは把握できないもの（有り得ないもの）であるという否定的（消極的）な相が顕れてくる。言語記号が実証的な思考から逃れ去ってし

まうこうした言語の否定的（消極的）な相を、ソシュールは次のように論述している。「言語の究極的な法則は、敢えて言えば、（言語記号が、その指し示さねばならないところのものと関係がないということの直接の結果として）、一つの項の中に存立しうるようなものは何も決して存在しないということであり、従ってａはｂの助けなしに、何かを指し示す力がないのであり、ｂもまたａの助けなしには同様なのであり、あるいは、この二つともが、従って、それらの相互的な差異によってしか価値がないということ、あるいはいずれも、それ自体の一部（“語根”等々を私は考えている）によってさえ、永遠に否定的（消極的）な差異のこの同じ網状組織を通して以外には、価値を持たないということなのである[21]」。

エングラーはこの3320.4項における、「物質的な記号に結び付けられる観念」を「シニフィアンに結び付けられるシニフィエ」と捉え、「言語の中のシニフィエは、社会的な明確さを持っており、この社会的な明確さは、刻み目の例が示すように、物質的な記号（シニフィアン）によって伝達される」としている[22]。だが、刻み目の例は社会的な明確さを表す例というよりも、上で我々が分析したように、記号の恣意的な性質を表すものとして挙げられているように思われる。また、単純に物質的な記号が言語のシニフィアンに置き換えられるのかどうかということも疑問が残る。というのは、ソシュールは聴覚的な記号だけでなく、視覚的な記号をも常に考慮に入れているのであって、この刻み目の例は後者に当たっているからである。この二つの種類の記号の対比から、前者の線条性、後者の空間性を彼は導きだしていたはずである。そして、言語記号の唯一の特殊性は、他のどんなそれよりも明確（正確）な結び付きを生み出すことであると、一般記号学の観点から強調されているのであって、そこで初めて言語記号を支える社会的な性格（契約性）が、前面に押し出されてくるのではなかろうか。そう考えるとき、いっそう言語記号の独自性が顕現し、明確にされるように思える。ちなみに、ソシュールはシニフィアンという術語を導入する以前、一時期、ソーム（sôme）という語を用いていた。

（２）3315.7項

この項では、記号の意味作用と価値について考察が行なわれている。

> 意味する［記号化する］（signifier）とはある観念にある記号をまとわせることを言うのと同様に、ある記号にある観念をまとわせることを言う。従って、そのような区別［意味作用（記号作用）の持つこの二つの相対するベクトルの区別］は、観念が表されている［意味されるものである］限りにおいて、すなわち、ある固有の記号をまとっている限りにおいて初めて文法的価値を持つのである[23]。

エングラーは、この箇所について次のような考察を加えている。

ここに、意味する「記号化する」(signifier) という語の持つ、そして意味作用 (signification) という語にも付与されるべきであろう能動的で力動的な意味が見て取れる。意味作用は意味するもの (signifiant) と意味されるもの (signifié) の間の動的な関係である。(……) 同時に、意味作用は対立的で差異的であるが故に、記号と同じ程度に、一つの価値なのである。価値の概念自体が拡張されなければならない。つまり価値は比較でき、かつ交換できるものである。それは、記号、シニフィエを指し示すが、また同様にシニフィアンも示す。シニフィエはシニフィアンの価値であり、逆にシニフィアンはシニフィエの価値である[24]。

我々は、エングラーの考察を一歩進めて、価値が辞項の相互関係から生じる非実体的な作用であると理解したい。ところで、ソシュールは第三回講義で、記号 (signe) と辞項 (terme) ならびに語 (mot) について、価値 (valeur) との関係で興味深い指摘をしている。

記号、辞項、語、等々、どんな術語を選択しようとも、次第にそれていってしまって、[全体 (ensemble) の] 一部分しか指し示さない危険にさらされるでしょう。そのような術語は存在しないのかも知れません。ある術語が価値の概念に適用されるや否や一方の側か、あるいは、もう一方の側に陥らないでいることは難しいのです[25]。

3315.7項で考察されていた意味作用 (signification) という用語も、いつの間にか、シニフィエだけを指し示し、記号 (signe) もシニフィアンだけを示すというような意味の移行 (滑り) が生ずる可能性が常に潜在しているということなのであり、言語記号が価値であるとすれば、その価値の概念を表す用語、つまり一方でも他方でもなく、あるいは一方であると同時に他方でもあるという「全体」(言語 [学] 的存在) を表す用語が存在しうるのかという重要な問題がここで浮上してくる。

言語活動 (言葉) とは、「音—思想」という「一枚の紙の表と裏のように」切り離し得ないものが、分節あるいは分割されていく領域を提供する場である。すなわちそれは、異なった二つのものが一致し一つの単位となる領域ということであり、そうした場を認めることは、一方では画定・弁別という実証的な機能の面が顕現すると同時に、他方では矛盾律の放棄というもう一つの否定的な面を伴うということを銘記しなければならない。「記号は二重のものである……そこに、記号学の最も困難な点がある[26]」とソシュールが述べているのは、ほかならぬそうした否定的な関係についてなのであり、こうした同じものと異なるものの交錯する場を、ソシュールは価値と比較したのであるが、「ある言語において、ある術語が価値の概念に適用されるやいなや、たちまち境界の一方の側にあるのか他方にあるのか、それとも同時に両側にあ

るのか知ることが不可能となるのである[27]」とコンスタンタンの取ったノートは言語の否定的な相を一層強く浮き彫りにしている。

結論

ここでは草稿のわずかな箇所を分析したにすぎないが、次のことを確認できたと思われる。言語理論を構成するメタ言語が言語である限り、自らもまた言語の持つ性質から逃れられないのであり、言語を還元するはずのもの（＝メタ言語あるいは理論）が、言語と隔たりがないほどに接近してしまい、両者の距離が零に収斂していくという事態が生じてくる。こうした経緯（言語と理論が重なり、同質のものになる経緯）をソシュールは、1909年1月19日、ちょうど第二回講義が行なわれている時期に、講義に出席していたリードランジェとの対談で述べている。

> この主題「静態言語学」の困難さを生じさせるのは、ちょうど幾何学の定理のように、いくつもの側面からそれを取り上げることができるという点にあります。静態言語学では、すべてが互いに他の定理の系になっています。単位を問題にするにせよ、差異を問題にするにせよ、対立、その他を問題にするにせよ、それらは同じことに帰着します。言語は緻密な体系であり、その理論もまた、言語と同じように緻密な体系でなければなりません。そこにこそ困難な点があるのです。というのも、言語に関する主張や見解を次々に提出したところで、何にもならないからです。それらを配列して体系にまとめあげることだけが、問題なのです。
>
> 通時言語学から始めなければならないでしょう。共時的なものは、それ自体のために扱われるべきです。しかし通時的なものとの絶えざる対立なしには、何ものにも到達できません[28]。

この一節について、立川健二は次のように解説している。「言語が形式体系であるのはもちろんのこと、それを対象とする理論、すなわち共時言語学もまた、相同的に形式体系でなければならないという。その形式体系のモデルを、ソシュールは幾何学にもとめているのである[29]」。だが、重要なことはおそらくその点にあるのではないだろう。ここで大切なのは、「単位を問題にするにせよ、差異を問題にするにせよ、対立、その他を問題にするにせよ」、それらが「同じことに帰着」するという事態が生じてしまうことなのであり、そして、すべてが帰着する「同じこと」が何を意味するかである。これを解く鍵は、「言語は緻密な体系であり、その理論もまた、言語と同じように緻密な体系でなければなりません」という、ソシュール自身の言葉に見出されるように思われる。対象としての言語は相依相関の「網状組織」を形成してい

る。そして、その理論においても、ある概念は、対立する、あるいは隣合う他の諸概念との相互的な差異によって規定されるのであり、例えば共時言語学と通時言語学とは相互依存の関係に置かれ、最早どちらが先で後かということが決定しえなくなる。つまり、理論体系自身も、永遠に否定的な「この同じ差異の網状組織」という様相を帯びてくるのであり、対象としての言語とその理論の同質性が現出してくるのである。そのことをソシュールは、言語に関する一般理論に関する書物を構想していた1894年頃に、既に次のように述べている。

> 言葉の中の一つの側面が、それ以外の面に先立ち優越しているとか、出発点に使われる前に存在しているなどと考える権利は、誰にも全くないのである。もし他の側面の外部に、すなわち抽象や一般化といった人間側の操作の完全な外部に、既に与えられた側面があるのなら、そうした権利もあるだろう。しかし、こんなケースに当てはまる側面が一つとしてないことは、よく考えてみるだけでわかるのである。
>
> （中略）
>
> だが我々が確立しようとしていることはすべて、言語学においてはただ一つであれそれ自体で定義される事実を認めるのは誤りだということである。したがってあらゆる出発点の必然的な不在というものが本当に存在するのであり、もしなんらかの読者がこの書物の最初から最後まで注意深く我々の思想を跡づけるように読むならば、その人は、きわめて厳密な順序を追うことなどは、いわば、不可能だったということを認めるだろうと我々は確信している。我々はあえて、読者の前に同じ考えをさまざまな形で再三再四繰り返して、提示するだろう。というのも、そこでは論証を根拠づけるために他のものよりもふさわしい出発点などというものは実際にはどこにも存在していないからである[30]。

対象である言葉の側面のどれ一つとして優劣がなく、しかもそれらが相互依存の網状組織を形成しているとすれば、どこにも特権的な出発点は存在しないことになる。対象としての言語と相似してその一般理論もまた、ただ一つとして「それ自体で定義される事実」を具えておらず、対象と理論は限り無く接近し、緊密に関連し合うことになる。ソシュールは、既にこの時点で、すべてがそれで決定されるという「体系」の問題が、解決不可能に近いものとして認識していたことになる。「a という均衡状態から b という均衡状態」へとすべての駒の関係を変えてしまうのに「駒を一つ移動させるだけで足りる」チェスにソシュールは言語の体系を例えていたが、言語の領域において、この順序というものは、きわめて重要なものであるはずであり、それが緻密な「理論」の問題になればなおのこと致命的な重大さを帯びてくるわけであり、したがって、書物の出発点の必然的な不在は、その到着点の不在を意味することにもなるからである。

註

1）Ferdinand de Saussure, *Ecrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Paris: Gallimard, 2002, pp12-14.

ソシュールの書き残した「一般言語学についてのノート」の草稿は同書から引用し、再出より *ELG* と略す。引用文中のイタリック体による強調は、傍点を付して示した。[　　] 内の語句は引用者が補ったものである。原文をできうる限り、煩瑣にならない程度に、註に示す。

2）ゴデルは、その『F・ド・ソシュール「一般言語学講義」の原資料』の中で、1893年の暮れから書き始められ、95年に放棄したと推定される「書物」の草稿を初めてまとまった形で紹介した。

Robert Godel, *Les Sources manuscrites du Cours de linguistique générale de F. de Saussure*, Genève: Droz, 1957.

再出より *SM* と略す。

3）*ELG* p.166.《Il y aura un jour un livre spécial et très intéressant à écrire sur le rôle du *mot* comme principal perturbateur de la science des mots.》

4）F. de Saussure,《Lettres de Ferdinand de Saussure à Antoine Meillet》, publiées par Emile Benveniste, *Cahiers Ferdinand de Saussure* 21, Genève: Droz, 1964, p.95.

Cahiers Ferdinand de Saussure（『ソシュール研究誌』）を再出より *CFS* と略す。

5）*SM*, p.35.

6）*SM*, p.32.

7）*ELG* p.210.《Nous nourrissons depuis bien des années cette conviction que la linguistique est une science *double*, et si profondément, irrémédiablement double qu'on peut à vrai dire se demander s'il y a une raison suffisante pour maintenir sous ce nom de *linguistique* une unité factice, génératrice précisément de toutes les erreurs, de tous les inextricables pièges contre lesquels nous nous débattons chaque jour.》

8）Emile Benveniste: *Problèmes de linguistique générale*, Paris: Gallimard, 1966, p.40.

9）*ELG* p.18.《Une *identité linguistique* a cela d'absolument particulier qu'elle implique l'association de deux éléments hétérogènes.》

10）コンスタンタンの講義ノートは、エングラーの校訂版による。

F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf Engler, Tome I, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1968, p.259. 再出より *CLG/E* と略す。

11）*ELG* p.336.

12）*ELG* p.335.《*Valeur* est éminemment synonyme à chaque instant de terme situé dans un système de termes similaires, de même qu'il est éminemment synonyme à chaque instant de chose échangeable. Prenant la chose échangeable d'une part, de l'autre les termes co-systématiques, cela n'offre aucune parenté. C'est le propre de la *valeur* de mettre en rapport ces deux choses. Elle les met en rapport d'une

manière qui va jusqu'à désespérer l'esprit par l'impossibilité de scruter si ces deux faces de la valeur diffèrent pour elle ou en quoi.》

13) Simon Bouquet, *Introduction à la lecture de Saussure*, Paris: Payot & Rivages, 1997, pp.321-322.

14) F. de Saussure, 《Cours de linguistique générale (1908-1909), Introduction》, édition critique par R. Godel, in *CFS* 15, 1957, p.38. 再出より *CLG/G* と略す。

15) *CLG/E* p.232. 《Le concept devient une qualité de la substance acoustique comme la sonorité devient une qualité de la substance conceptuelle.》

16) *ELG* p.333. 《Dans l'association constituant le signe il n'y a rien depuis le premier moment que deux *valeurs existant l'une en vertu de l'autre.*》

17) *Ibid.*, p.336. 《Le rapport *simile : dissimile* est une chose parfaitement différente du rapport *simile-similia*, et ce rapport est néanmoins insaisissablement [*sic*] et jusqu'au tréfonds de la notion de valeur.》

18) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, édition critique préparée par Tullio De Mauro, Paris: Payot, 1972, p.355.

19) *ELG* pp.115-116. 《Toute chose matérielle est déjà pour nous *signe*: c'est-à-dire impression que nous associons à d'autres, [...]. La seule particularité du signe linguistique est de produire une association plus précise que toute autre, et peut-être verra-t-on que c'est là la forme la plus parfaite d'associations d'idées, ne pouvant être réalisée que sur un sôme conventionnel.》

20) *ELG* p.113.

21) *ELG* pp.218-219.

《A ce que nous osons dire, la loi tout à fait finale du langage est qu'il n'y a jamais rien qui puisse résider dans *un* terme (par suite directe de ce que les symboles linguistiques sont sans relation avec ce qu'ils doivent désigner), que *a* est impuissant à rien désigner sans le secours de *b*, celui-ci de même sans le secours de *a*: ou que tous deux ne valent donc que par leur réciproque *différence*, ou qu'aucun ne vaut, même par une partie quelconque de soi (je suppose 《la racine》, etc.), autrement que par ce même plexus de différences éternellement négatives.》

22) Rudolf Engler, 《Rôle et place d'une sémantique dans une linguistique saussurienne》, *CFS* 28, p.48.

23) *ELG* p.109. 《*Signifier* veut dire aussi bien revêtir un signe d'une idée que revêtir une idée d'un signe. Ainsi: 《telle distinction n'a de valeur grammaticale que pour autant qu'elle est *signifiée*》 = revêtue d'un signe propre.》

24) Rudolf Engler, 《Remarques sur Saussure, son système et sa terminologie》, *CFS* 22, 1966, pp.37-38.

25) *SM*, p.192. 《N'importe quel terme on choisira: signe, terme, mot etc., il glissera à côté et sera en danger de ne désigner qu'une partie. Probablement même qu'il ne peut y en avoir: aussitôt qu'un terme s'applique à une notion de valeur, il est difficile de ne pas tomber d'un côté ou de l'autre.》
(デガリエによる第三回講義聴講ノート pp.211～212).

26) *CLG/G* p.24. 《Le signe est double: [...] c'est là le point le plus difficile de la sémiologie.》

27) *CLG/E* p.151.

28) *SM*, p.29.

29) 立川健二、1986『《力》の思想家ソシュール』、書肆風の薔薇、p.201.

30) *ELG* pp.197-198.《On n'a jamais le droit de considérer un côté du langage comme antérieur et supérieur aux autres et devant servir de point de départ. On en aurait le droit, s'il y avait un côté qui fût donné hors des autres, c'est-à-dire hors de toute opération d'abstraction et de généralisation de notre part; mais il suffit de réfléchir pour voir qu'il n'y en a pas un seul qui soit dans ce cas. [.....]. Mais tout ce que nous tendons à établir, c'est qu'il est faux d'admettre en linguistique un seul fait comme défini en soi. Il y a donc véritablement absence nécessaire de tout point de départ, et si quelque lecteur veut bien suivre attentivement notre pensée d'un bout à l'autre de ce volume, il reconnaîtra, nous en sommes persuadé, qu'il était pour ainsi dire impossible de suivre un ordre très rigoureux. Nous nous permettrons de remettre, jusqu'à trois ou quatre fois sous différentes formes, la même idée sous les yeux du lecteur, parce qu'il n'existe réellement aucun point de départ plus indiqué qu'un autre pour y fonder la démonstration.》

（こんどう・まなき　国際言語学部助教授）